

# 青年期における「異性不安」研究の現状と今後の課題

東京大学教育心理学研究室 富 重 健 一

## Review of the Studies on “Heterosocial Anxiety” in Adolescence : —Advances, Issues, and Future Directions—

Ken'ichi TOMISHIGE

It has been thought that establishing and keeping stable heterosocial relationships are socially-developmentally important for all adolescents, and many of them sometimes experience anxiety or difficulty in heterosocial situations. Present paper gave an outline of current researches concerning the consequences, causal models, and remedial approaches of ‘Heterosocial Anxiety’ (including ‘dating anxiety’, ‘minimal dater’, etc.). Based on this, some essential issues and possible future directions were also discussed.

### 目 次

- I. はじめに
- II. 研究の意義
- III. 研究の現状
  - A. 異性不安の持つ影響
  - B. 異性不安の因果モデル
  - C. 異性不安に対する治療的アプローチ
- VI. 全般的問題点と今後のあり方
  - A. 定義内容の問題
  - B. 類似概念との異同の問題
  - C. 研究対象の問題
  - D. 測定についての問題
  - E. 今後のあり方

### I. はじめに

異性との対人状況における様々な心理・対人的問題 (Heterosocial dysfunction : Hansen, Christopher, & Nangle, 1992) について、近年社会心理学・青年発達心理学の立場からの学問的関心が高まりつつある。本稿では、その中でも特に「異性との相互作用に対する不安や困難」(以下、『異性不安』)に焦点を当てた先行諸研究の現状を概観し、問題点を指摘した上で将来の研究のあるべき方向性について考察してゆきたいと考える。

では、なぜ「異性不安」が取り上げられるべきなのか。

### II. 研究の意義

青年期はいわゆる「移行期」であり、心理的にも対人的にも数多くの変化が急激に進む時期である (Peterson & Hamburg, 1986)。そうした変化の中で最も大きなもののひとつに「新しい対人相互作用のパターンの発現」があるだろう。より複雑化した、個としての独立と責任ある行動が求められてゆくような対人関係が主要となると同時に、仲間の行動の観察・模倣・フィードバックを通じて (Kelly & Hansen, 1987) 異性との相互作用が増加してくるのは、まさに青年期においてである (Csikszentmihalyi & Larson, 1984 ; Spreadbury, 1982)。

一方、初潮・精通といった生理的・身体的なドラマティックな変化の中で、青年は男性・女性が持つべきとされる社会的役割 (性役割) とそれに応じた行動を身につけ、同性・異性双方の性役割の持つ社会的価値を意識し、識別的に捉えてゆくようになる (伊藤・秋津, 1983 ; 斉藤, 1985)。こういった中で男女は互いの身体と心の違いを意識し、関心を持ち、時には戸惑いや不安を覚えるようになるのかもしれない。

また、発達心理学の立場からも、両親以外の異性との安定・成熟した対人関係の確立を青年期における「発達課題」の1つとして挙げる研究者は多い (Newman & Newman, 1988他 ; また、成人期前期における発達課題として、Erikson, 1973)。異性との相互作用は、対人的なコンピテンスの獲得を促進し、性役割行動を確立し、家庭・両親からの分離を促すなどの点で独特の発達の意

義を持っており、青年期以降の対一異性関係のあり方を規定するものと考えられている (Kelly & Hansen, 1987)。

また、今世紀に入って一特に1960年代の「性の革命」以後一、青年期における性行動とそれに対する見方が劇的に変化をとげ (Hansen et al., 1992)、様々なメディアを通じて性や男女関係についての知識や考え方が行き渡ってきた中で、青年期における異性との相互作用の内容や異性観も多様化しつつある。そういう意味からも、青年期における対一異性関係は青年本人にとっても、またそれ以外の年代の人々にとっても一層その重要度を増してきているといえよう。

こうした中で、多くの青年は異性との人間関係をめぐる様々な困難や不安を抱えている。またこうした困難や不安は、青年期の男子・女子が抱えているであろう様々な問題と深く関わりあいながら、彼らの悩み・苦悩の中で大きなウェイトを占めていると予想される。

Kolko & Millan (1985) によると、米中西部の大学では男性54%、女性の42%がデート場面で何らかの困難を感じている、という。同様に、アメリカの大学生3800人を対象とした調査の結果、37%の男性と25%の女性が、異性との相互作用に関して「なんとなく」または「たいへん」不安を感じると答えた、という報告 (Arkowitz et al., 1978) もある。

このように、比較的フランクな異性関係が容認されていると思われる欧米においても、異性とのつき合いに困難や不安を感じている人は多い。このような調査が日本で実際に行われた例はあまりないが、おそらく同様の傾向がみられることだろう。

### III. 研究の現状

ここまで述べたように、青年期の男子・女子における、異性との対人相互作用に伴う不安や困難がきわめて重要な問題となっているにも関わらず、こうした問題を直接扱っている心理学的研究は、今のところあまり多くない。特に日本においては、ほとんどないというのが現状である。そこで、以下主に米国における異性不安の先行研究を概観する。

異性不安に対する従来の心理学的なアプローチは、大きく3つにわけて考えることができるだろう。

1. 異性不安が青年の社会的適応や心理的健康に対してどのような悪影響を及ぼしうるかを明らかにしようとする試み。
2. 異性不安を個人的・内的特性として考えるに当

たって、その原因となる様々な要因を明らかにし、因果関係のモデルを構築しようとする試み。

3. 異性不安によって対人的・心理的に不適応を起している人々に対する最も有効な介入方法は何かを明らかにし、臨床場面に適用していかうとする試み。

本稿では、従来十分検討されてこなかった感のある2を中心に、適宜1や3についても紹介することにする。なお、本稿では異性不安を様々な「異性対人状況における不安・苦悩・困難」に類似・関連する諸概念 (デート不安・low-frequency dater・heterosocially incompetent などを含む) を包含するものとして定義することにする。

#### A. 異性不安の持つ影響

異性不安が、その人に、そして当人の対人関係にどのような影響を与えているのかという点について、いくつかの先行研究の知見が蓄積されている。これらをまとめてみると、異性不安は主に2つの否定的影響をもたらすと考えられる。

1. 否定的な異性対人経験にともなう社会的回避傾向・非親和的傾向が強まったり、否定的自己評価傾向が強まる。その結果、社会的不適応状態に陥ったり、心理的な健康状態が損なわれる。
2. 1や2を媒介して、身体的側面 (特に、性的経験の側面) に否定的影響を与える。

##### 1. 社会的不適応・心理的問題

例えば、異性不安者は異性との対人相互作用の可能性のある状況を避けようとする傾向があり、それが高じると日常生活に支障をきたすことさえある (Hope & Heimberg, 1990)。また、このような傾向は同性との対人相互作用の状況においても当てはまるという (Himadi et al., 1980; Robins, 1986)。さらに、不安の高い人は、低い人と比べてデートの頻度や異性との個人的付き合いが少ないという報告 (Twentyman & McFall, 1975; Himadi et al., 1980) もなされている。一方心理的健康への悪影響については、一例として異性不安が孤独感 (Cheek & Busch, 1981)、抑うつ傾向やアルコール依存 (Hope & Heimberg, 1990) と関連しているという指摘がある。

##### 2. 身体への悪影響

異性不安の高い人は異性との個人的付き合いを回避する傾向があり、満足の行く性的経験の可能性を失っている (Leary, 1983)。特に性行動は、「行動するに当たっての厳密なルールがない・社会的タブーとされている・学習の機会がほとんどない」などの点から、不安の影響を

特に強く受けるのではないかと予想される。実際、Leary & Dobbins (1983)によると、現在行っている異性交際で経験する不安が、回答者の性的経験の有無・回数・満足度、及び女性の用いる避妊方法の違いに関連しているという。また、デート不安の高い男性は、性行動の際に早漏や性的不能になりやすい (Barlow, 1988) という報告もある。

もっとも、性行動に関しては必ずしも「不安→性行動」といった一方の因果関係だけではないようにも思われる。性行動に伴って生じた劣等感や苦悩が異性との相互作用に対する不安を生む、ということも十分考えられるからである (Hansen et al., 1992)。

## B. 異性不安の因果モデル

従来、4つの主要な異性不安の因果モデルが提示されてきた。これらはどれも治療モデルの意味合いが強く、異性不安の治療的介入におけるいくつかのアプローチと対応している面がある。以下に4つのモデルの概要と先行研究をレビューすることになるが、それぞれのモデルは相互に背反的であると考えべきではなく、異性不安の原因と考えられる内的な諸要因が、相互に複雑に関連しながら異性不安に影響を与えると考えるべきであろう。

### 1. 条件付けモデル

過去の異性対人状況における否定的な体験が後の類似状況に遭遇した際に想起され、不安が喚起される (条件づけられた不安)。これは系統的脱感作法が異性不安に対して効果を持つことから示唆されるものであり (Curran, 1975; Curran et al., 1980)、その点生理的メカニズム (刺激-反応学習) から不安が生じるという点を重要視したモデルであるといえる (実際、心拍数などの生理的指標を用いた研究が多い。例えば、Borkovec et al., 1974)。しかし、具体的にどのような体験が不安と結びつきやすいのかという点は明らかになっていない。

### 2. スキル欠如モデル

適切な方法で対人相互作用を行うために必要な最低限度の能力 (=対人スキル) がないことから否定的な体験をしたり、相手から否定的な反応を得たりすることによって、結果的に不安が生じると考える立場がある (Kelly, 1982他)。例えば、デート不安の高い人は、低い人と比較して全般的に対人スキルが不足していると評定されるという知見が様々な研究で得られている (Twentyman & McFall, 1975; Greenwald, 1977)。もっとも、単に「対人スキルの欠如」といっても、特定

の対人反応 (話しかける等) を遂行するための基本的な能力 (うなずく、アイ・コンタクト等) が欠如している場合と、基本的な対人スキルを状況に応じて適切な形で遂行できない (反応強度・頻度、他の反応とのバランス、タイミング等) 場合とが考えられる (Fischetti et al., 1977; Bellack, 1979)。

ところで、異性との関係において必要であるとされる個々のスキルとしては「アイ・コンタクト」「表情」「声の調子」「ジェスチャー」「自己開示」など、いくつかの要素が明らかになりつつあり (Kolko & Millan, 1985; Conger & Conger, 1982)、デート不安者はこの点に関して、相手との相互作用場面で長い間沈黙したり、否定的な意見を多く述べたり、相手の話に対する反応が遅いという知見 (Kelly, 1982) が得られている。

### 3. 認知的モデル

異性不安が認知的に媒介されたものとする立場では、異性他者との対人関係における自己の様々な側面に対する否定的な認知的評価が異性不安を媒介する、という点を強調している。そこでは単に、過去の異性との否定的な体験そのものや、あるいは客観的に評定されるような異性対人スキルの欠如それ自体が不安を規定するのではなく、異性との否定体験がどの程度今に影響しているかという認知や否定体験の選択的想起、また自分の異性に対する振るまい方に対しどの程度満足しているか、といった認知的要因が不安を媒介するのだと考える。以下、そのようないくつかの認知的要因について触れる。

#### a. 否定的な自己評価

重要な異性との対人場面において自己を「好ましくない」と評価した時に異性不安が感じられるという知見は、様々な先行研究において一貫して示されている。例えば、自尊心尺度と対人不安尺度の間には一貫して負の高い相関が得られている (例えば、Cheek & Melchior, 1990; 他) ことから、異性不安においても自尊心との間に負の相関が得られることが予想される。また、異性不安を持つ人は、対人場面の始まる前やその最中に、自分について否定的な解釈を下すことが多い (Glass, Merluzzi, Biever & Larsen, 1982)。さらに、自己評価の低い人は、異性との対人場面における否定的な出来事 (失敗経験・他者からの否定的反応等) を思いだしやすく、その事にこだわる (O'Banion & Arkowitz, 1977) という報告もある。

#### b. 不合理な対人観

不合理な対人観 (『～ねばならない』といった、絶対的な表現で表されるような考え方・信念: Ellis, 1962; 松村, 1991) を持つことが対人不安や異性不安を生み出す

といわれている。特に、異性を含む対人場面において他者の是認・他者からの受容を過度に重視する傾向、あるいは自分の対人的なふるまいに関して過度に高い評価基準を持つ傾向を示す信念が対人不安・デート不安と結びついているという報告がある (Goldfried & Sobocinski, 1975)。そのほか、異性との相互作用に際して過度の決めつけ(「彼女には彼がいるに決まっている」など)や、「全か無か (all or nothing)」的な発想をする傾向がデート不安と関連していることが明らかになっている (Hope & Heimberg, 1990のケースから)。これは、不安によって現実の状況や他者からの反応を正確に認知することができなくなることが更なる不安を生むということを示唆していると思われる。

#### c. 公的自己意識

公的自己意識(他者が意識することのできる自己の諸側面—身体、行動—に意識を向ける傾向: Fenigstein et al., 1975)の強い人は対人不安を感じやすいといわれる(菅原, 1986)。この背後には、他者からの否定的な評価に対する恐れと、他者から「見られる」ことによって自分の評価を確認したいという願望双方の葛藤があるのではないかと考えられる。このような考え方が異性—対人状況にどの程度適合するかについて直接的に調べた研究はないが、デート不安の高い人の抱く想念は、低不安者と比較して他者からみられる自己により注目しがちである (Hope & Heimberg, 1990のレビューより) という報告がある。

#### d. 性役割

男性性役割を強く持っている人ほど異性対人状況における不安が少ないという研究がある (Robins, 1986)。すなわち、自分を「積極的」で、「強健」で、「男性的」と認知している人ほど異性不安が少ない、ということになる。これは、従来の性役割研究において得られている、「男性性役割を多く持っている人は(男女を問わず)心理的に健康である」という知見を裏付ける結果となっている (Antill & Cunningham, 1979他)。しかし最近いわれるように、性役割の測定に用いられてきた自己報告尺度には問題点が多くあり (Davidson-katz, 1992)、それらの問題を克服した尺度の作成によって全く異なった結果が得られる可能性がある。また、従来「性役割」という構成概念は一般に1次元的に捉えられており、実際の「性 (gender)」と関連する様々な心理的・社会的特性の全体像を把握しきれていないという示唆 (Taylor & Hall, 1982) もある。

一方日本では、70年代半ばから「性役割期待」「性役割観」というような、性役割に対する多側面からの接近が

なされてはきたが (柏木, 1974; 伊藤・秋津, 1983)、対人不安・異性不安との関わりにおいて論じられることは今までほとんどなかった。

#### 4. その他の内的要因モデル

##### a. 自己呈示モデル (Schlenker & Leary, 1982)

自分が相互作用の相手(異性も含めて)に対して、好ましい印象を与えようとする動機づけが高いほど、また相手に好印象を与えるために必要な行動(自己呈示行動)をうまく行えるかどうかに関する確信度が低いほど(低効力期待)、そしてそれによって実際相手が自分に対して好印象を持ったかどうかに関する確信度が低いほど(低結果期待)、失敗したときの否定的な影響は大きく、自己呈示を行う前の否定的な予期が生み出される。これらが複合して対人不安(そして、その特化したタイプとしての異性不安)が喚起されるという (Schlenker & Leary, 1982)。

自己呈示モデルは、基本的には認知モデルの1つだが、先に挙げた「条件付けモデル」「スキル欠如モデル」をも説明できる包括的モデルであると考えられている (Leary, 1983)。また、このモデルは当初「対人不安の治療モデル」として構想されていたが、「人は同性より異性に対して、自分をよく見せることに関心を持っている」 (Leary, 1983) ことから考えて、異性不安においてもこのモデルは適合的であることが予想される。

##### b. 身体的魅力と異性不安

現在のところ十分な検証がなされたとはいえないが、身体的魅力(あるいはその認知)と対人不安・異性不安との間に何らかの関連があると考えられている。例えば、自己の身体的魅力に関する自己評価と異性不安の間に負の相関がみられたという報告 (Leary, 1983のレビューより) がある。また、身体的魅力の他者評定値と自己報告された異性不安との間に相関がみられたという報告 (Glasgow & Arkowitz, 1975他) もある。

ただ、身体的魅力の高い人はあらゆる面で他者から肯定的に評価される傾向がある (Snyder et al., 1977他) ため、異性不安と関連するのは果たして魅力そのものなのか、魅力に媒介されて肯定的な評価を受ける諸特性(知的である・対人スキルに長じている・面白い・落ち着いている、等: Snyder et al., 1977) なのかは明らかではない。更に「客観的な魅力度」と「自己認知された魅力」のどちらがより異性不安と関連しているのかについても、議論の分かれるところだろう。

#### C. 異性不安に対する治療的アプローチ

重篤な異性不安の症候を示す人が存在する (Hope &

Heimberg, 1990)。このような人々に対して、何らかの治療的介入が必要になるわけだが、従来カウンセラーや臨床家の間では、以下の4つのアプローチが単独で、あるいはそのうちのいくつかが組み合わせて試みられ、その効果が比較されてきた。

1. 模擬デート (practice dating)  
協力者、あるいは同程度の異性不安を持つ異性とクライアントとを模擬的に接触させる方法。
2. 対人スキルトレーニング  
モデリング・リハーサル・フィードバックなど、いわゆる社会的学習過程を通じて、異性との相互作用に必要なと思われるスキルを学習させる方法。
3. 系統的脱感作法  
不安を喚起しがちな、具体的な異性との相互作用をイメージさせて、それとリラクゼーションを連合させることによって徐々に不安を低減させる方法。
4. 認知的変容法 (cognitive modification)  
自己言及 (self-statement) や不合理な信念 (irrational belief) に焦点を当てて、その変容を図ることによって不安を低減させる方法。

ここでは個々の研究に言及する余裕はないので、従来の検証研究から得られた結論 (Curran, 1977; Arkowitz, 1977のレビューを参考に Hope & Heimberg, 1990) だけを紹介することにする。

それによると、どの方法も異性不安に対してある程度の効果を持ち、なおかつその効果はある程度持続的である。また4つの方法の間には効果の大きさに関する優劣はほとんど見られず、2つ以上の方法を併用しても効果量が増大しないことが明らかになっている。しかし、治療群の不安の強度の統制や対照群の処遇、フォローアップの方法、効果測定の方法等問題点があり、断定的結論は「今後の研究を待つべきだ」と述べられている。

この結果は、4つの方法はどれも互いに背反的なものではなく、皆ある程度共通の治療的要素(スキルの側面・脱感作的側面・認知的側面)を持っているということを示唆しているかもしれない。また自己呈示モデルの立場に立つ研究者は、4つの方法がどれも「自己呈示の自信や効率を高める」という共通の効果を持つのだと考える (Leary, 1983) であろう。

しかしその一方で、全ての人に対して効果を持つ方法があるのではなく、個々人の持つ歴史的背景(どのような因果のパスを経由して異性不安に陥ったのか)に即した方法が最も効果的なのではないかという意見もある。

すると、全ての方法に効果の差がみられないというのは、方法の側に共通点があるのではなく、多様な原因から異性不安に陥った人が治療群に混在していたからだという解釈も成り立ちうる (Hope & Heimberg, 1990)。

#### IV. 全般的問題点及び今後のありかた

以上、異性不安に関するいくつかの側面からの心理学的アプローチをレビューしてきたが、最後にこれらの先行研究全体に関係する問題点をいくつか指摘し、あわせて今後の研究のあり方について考察したい。

##### A. 定義内容の問題

異性不安の定義内容に関する研究者の考え方は非常にまちまちとなっている。これには、従来心理学の領域で「不安」という概念が問題の多い、とらえどころのない概念だとされてきた (Spielberger, 1966) という背景があると思われる。「不安」という概念は、生理的・認知的・行動的要素が複雑に混じり合っていると考えられ (Leary, 1983; 生和訳, 1990), それらが時に密接な関係を持ちながら、あるいは相互に独立して「不安」の内容を規定している (生和, 1990の訳注) と思われる。従って、3つの要素のうちどれを異性不安の定義内容の中核として位置づけるかが問題として浮かび上がってくる。

従来の異性不安研究では、異性不安(研究によっては、デート不安や heterosocial incompetence, minimal dater, 等と命名されている)の定義内容として、不安感情の経験に伴って起こる行動反応(回避的傾向・非親和的傾向を表すような諸行動)を中核に据えたものが多く、どのような行動が異性不安を特徴づけるかという点で、研究者間の意見が分かれている。その中には、「デートの回数」(Greenwald, 1978他)や「性的行動への積極性」(Barlow, 1986他)によって異性不安を操作的に定義しようとする人もいる。しかし、これらが果たして異性不安の定義として適切なものであるかどうかは疑問であろう。目に見える行動は、主観的感情としての不安の高低に必ずしも随伴するわけではないことがいわれており (生和, 1990の訳注), また異性不安の高低とは無関係に変化する可能性がある (例えば、異性に会える機会の少ない職場で働いている, など)。以上のことを考えあわせると、異性不安の定義内容の中核に「行動の量・質」をおくことは避けるべきであると思われる。今後は、主観的感情状態としての「不安」と、それに随伴する可能性のある「不安的行動」を概念的に区別し、両者の関係を細かく検討してゆくべきだろう。

また、従来研究者は「ロマンティック」な異性対象（排他的な、特別な好意を持っている異性対象）との、親密な相互作用（デート等）状況における不安として異性不安を考えていた。しかし、このように不安を感じる対象や状況を限定することに問題はないだろうか。従来の異性不安研究において、「ロマンティック」でない異性対象との、通常の相互作用状況における、すなわち私たちが日常的に経験するような異性関係における不安があまり問題にされてこなかったのにはいくつかの理由があるだろう。

1つに、対人不安 (Social Anxiety) 研究において、同性に対する不安と異性に対する不安が一緒に扱われているという感がある。例えば、「対人不安尺度」として構成された多くの尺度の項目の中には、必ずといっていいほど「異性に対する不安」の測定を意図していると思われる項目が含まれている（例えば Leary, 1983a; Watson & Friend, 1969; Cheek & Melchior, 1990）。つまり対人不安研究では一般に不安を感じる対象の区別は問題にされることが少なく、特に異性不安という概念を設ける必要が認識されていないのである。その一方で、対人不安喚起の対象として「異性」が同性よりも強く不安を喚起させる可能性がある (Zimbardo, 1977) ともいわれており、対人不安研究の領域においても「異性に対する不安」を取り上げた先行研究もいくつかあるが (Leary & Dobbins, 1983; Snyder et al., 1977), その場合は、デートのような状況や性行動に関連した状況が取り上げられていることがほとんどである。また、「デート不安」等の用語が用いられている諸研究では、「特定の対象・状況において不安をより強く感じる人がいる」という前提の下で、対人不安研究とはある程度独立して、クライアントの体験—特定異性との親密な相互作用における不安—に直結した研究・介入が行われてきた。

2つめは、先行研究の土壌となる文化的背景の問題である。例えば青年期の異性関係における社会文化的な要因が研究のスタイルに影響を及ぼしているのではないだろうか。

日本で一般的に「デート」という場合、それはある程度特定の異性（いわゆる「ステディ」）と2人きりで時間と空間を共有することとして考えられていることが多いと思うが、欧米では「デート」は不特定の異性で行うべきものであり (Steven-Long & Cobb, 1983), 「ステディ」が幾度かのデートを経て初めて選択される、という形をとっているようだ。また、日本と比較して欧米では男女関係や異性愛を重要なものとする文化的背景があるように思われる。日本では依然として異性関係に関する規

範が厳しく、男性と女性の間になお心理的・社会的距離がある (堀毛, 1990) のに対し、欧米では男女双方が社会的制約にとらわれず積極的に異性と関わろうとしているように思われる。

このような研究の状況下で、日本にこれら「デート不安」・「異性社会不安」の知見をそのまま導入し、日本の青年男子・女子が実際に直面している問題に適用してゆくことは若干無理があるように思われる。これもあくまで私個人の見解だが、日本の青年が発達させる「ロマンティック」な男女関係は、一般的な他者（同性・異性を問わず）と特に変わりのないところから（欧米的な、datingのような行動をとらないような形で）始まるように思われる。また社会関係の総体においては、必ずしも「ロマンティック」でないような男女間の相互作用がその多くを占めている以上、より一般的な異性関係を扱えるように異性不安を定義し、それに基づいて実証的な検討を行う方が現実的で有意義であろう。

## B. 類似概念との異同の問題

従来の異性不安研究では、すでに実証研究が進展してモデルの整備も進んでいる対人不安に関する研究とさまざまな点で類似したもの、あるいはそれを援用したものが多し。もちろん異性不安も対人不安も、対人的状況で感じられる不安や苦悩という点で共通部分をもつ概念であり、対人不安研究で得られた知見は今後異性不安研究を進めるに当たり参考にすべき点が多いと考えられる。

ただ、現段階では具体的に異性不安と対人不安がどのような点で共通点・相違点を持つかが明らかにされていないようだ。このことは、特に先に述べたように異性不安を「一般的な異性との相互作用における不安」と広く（すなわち、より対人不安の定義に近い形で）定義した上で研究を進めて行く場合、より重要な問題となり得ると思われる。

今後は、対人不安を始めとする類似諸概念との共通点・相違点を意識して研究を進めてゆく必要があるだろう。そのためには、異性不安及び類似概念に関連する要因の違いや、関連要因が各概念に対して持っている重みづけの違いについて細かく検討することによって、異性不安という構成概念を設定することの、研究上の有意義性を明確にすることが第一に必要であると考えられる。

## C. 研究対象の問題

従来の異性不安研究では、専ら男子大学生を被験者として研究が進められてきた。これに関しては、経験的に男性の方がより異性不安を感じやすいと考えられている

こと、および被験者を募集するに当たって、大学生がもっとも集めやすいということが背景にあると考えられるが、この点に関しての問題は多い。

Glasgow & Arkowitz (1975) の示唆によれば、男性と女性とでデート不安に関連する要因に性差がみられるのではないかと、いう。また異性不安は、不安を感じる主体の側の性差と、不安を喚起させる対象の側の性差の双方に関わる。つまり、2重の意味での性差が見られる可能性があるという点で、対人不安とは異なる特性を持つと考えられる。

このような理由から、今後は女性を対象とした研究を積極的に進め(少数の例として Haemalie, 1983などがある)、あるいは男女双方を対象とした研究において男女別に詳細な分析・比較検討を行うことが必要であろう。

また異性不安が青年期に特に問題となり得る現象であるのならば、10代半ばから後半の青年(中学生・高校生)を対象にした研究も当然行われるべきであり、また青年期における異性不安が後々まで持続的に影響する可能性があることから、青年期以降の人々を対象にした研究も今後進めてゆく必要があるだろう。

#### D. 測定についての問題

異性不安を測定するに当たって、頻繁に用いられているのは自己報告尺度による測定(例えば、比較的よく用いられているものに SHI <Twentyman and McFall, 1975>がある)と実験場面における行動観察だが、従来の質問紙による研究では、先に述べた定義内容の混乱から不安の認知・感情的側面と、不安に伴い得る行動とを測定的な水準で区別しようという試みがなされなかった(対人不安研究における試みの例は Leary, 1983a)。

今後は、測定値の持つ意味がより明確で、個々の研究の比較や統合が容易な新しい「異性不安尺度」を構成し(一例として富重, 1993)、その信頼性・妥当性を高めてゆく努力をするべきであろう。その一方で、自己報告尺度の持つ測定的な限界をふまえて、インタビュー・実験(特に、異性との相互作用実験)との併用を積極的に図る必要があろう。

なお、測定・データの収集に当たっては、性に関する事柄も含め被験者のプライバシーに触れる可能性が多いと思われる。調査・実験における倫理的配慮を徹底すべきであろう。

#### E. 今後の研究のあり方

以上のような問題点をふまえ、今後どのようなアプローチを行ってゆくべきだろうか。

筆者が最近行った研究(富重, 1993)では、異性不安を「異性との対人的な相互作用を経験したり、またはそれを予期した際に感じる不快な認知-感情状態、及びそれを経験する傾向」と定義した上で異性不安尺度(17<男性用>・19<女性用>項目、6件法)を構成した。そして類似概念(デート不安・対人不安)との比較及び性差の検討を念頭に置きつつ、異性不安に関連する可能性があるが先行研究の知見の少ない(あるいは一貫していない)3つの要因(不合理対人観・役割認知・過去の異性体験)について検討を行った。

筆者は、今後この研究を1つの足がかりとして、異性不安に関連する要因、特に認知的な個々の要因を明らかにしてゆき、最終的には巨視的な因果の方向性を探索し、モデルを構成する方向へと進むことが重要だと考える。その際、今までほとんど研究のその上には乗せられなかったもので、異性不安との関連が有力視される認知的な事象——異性を認知するしかたの複雑さ・異性との相互作用に対する動機づけの方向と強さ・過去の異性の親との相互作用に対する認知・「性」に対する受容度や劣等感、等——などを取り上げてゆく必要があるし、また従来省みられなかった男女差の詳細な検討も焦眉の課題であろう。

(指導教官 井上健治教授)

## 文 献

- Antill, J. K., & Cunningham, J. D. 1979 Self-esteem as a function of masculinity in both sexes. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 783-785.
- Arkowitz, H., Hinton, R., Perl, J., & Himadi, W. 1978 Treatment strategies for dating anxiety in college men based on real-life practice. *The Counseling Psychologist*, **7**, 41-46.
- Arkowitz, H. 1977 Measurement and modification of minimal dating behavior. In M. Hersen, R. Eisler, & P. Miller (eds.), *Progress in Behavior Modification* (vol.5, pp.1-61). Academic Press.
- Barlow, D. H. 1986 Causes of sexual dysfunction: The role of anxiety and cognitive interference. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **54**, 140-145.
- Bellack, A. S. 1979 Behavioral assessment of social skills. In A. S. Bellack & M. Hersen (eds.), *Research and Practice in Social Skills Training*. Plenum.
- Borkovec, T. D., Stone, N. M., O'Brien, G. T., & Kaloupek, D.G. 1974 Evaluation of a clinically relevant target behavior for analogue outcome research. *Behavior Therapy*, **5**, 503-513.
- Brodtt, S. E., & Zimbardo, P. G. 1981 Modifying shyness-related social behavior through symptom misattribution. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 437-449.
- Cheek, J. M., & Busch, C. M. 1981 The influence of shyness on loneliness in a new situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **7**, 572-577.

- Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 330-339.
- Cheek, J. M., & Melchior, L. A. 1990 Shyness, self-esteem, and self-consciousness. In H. Leitenberg (ed.), *Handbook of Social and Evaluation Anxiety* (pp.47-82). New York : Plenum Press.
- Conger, J. C., & Conger, A. J. 1982 Components of heterosocial competence. In J. P. Curran & P. M. Monti (eds.), *Social Skills Training : A Practical Handbook for Assessment and Treatment* (pp.313-347). New York : Guilford.
- Csikszentmihalyi, M. & Larson, R. 1984 *Being Adolescent : Conflict and Growth in the Teenage Years*. New York : Basic Books.
- Curran, J. P. 1975 Social skills and systematic desensitization in reducing dating anxiety. *Behavior Research and Therapy*, **13**, 65-68.
- Curran, J. P. 1977 Skills training as an approach to the treatment of heterosexual social anxiety : A review. *Psychological Bulletin*, **84**, 140-157.
- Davidson-katz, K. 1991 Gender roles and health. In C. R. Snyder & D. R. Forsyth (eds.), *Handbook of Social and Clinical Psychology* (pp.179-196). Pergamon.
- Ellis, A. 1962 *Reason and Emotion in Psychotherapy*. New York : Lyle Stuart.
- Erikson, E. H. 小此木啓吾 (訳) 1972 自我同一性 誠信書房.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Fischetti, M., Curran, J. P., & Wessberg, H. W. 1975 A sense of timing : A skill deficit in heterosexual-socially anxious males. *Behavior Modification*, **1**, 179-194.
- Glasgow, R., & Arkowitz, H. 1975 The behavioral assessment of male and female social competence in dyadic heterosexual interactions. *Behavior Therapy*, **6**, 488-498.
- Glass, C. R., Merluzzi, T. V., Biever, J. L., & Larsen, K. H. 1982 Cognitive assessment of social anxiety : Development and validation of a self-assessment questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **6**, 37-56.
- Goldfried, M. R., & Sobocinski, D. 1975 Effect of irrational beliefs on emotional arousal. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 504-510.
- Greenwald, D. P. 1978 The behavioral assessment of differences in social skills and social anxiety in female college students. *Behavior Therapy*, **8**, 925-937.
- Haemmerlie, F. M. 1983 Heterosocial anxiety in college females : A biased interactions treatment. *Behavior Modification*, **7**, 611-623.
- Hansen, D. J., Christopher, J. S., Nangle, D. W. 1992 Adolescent heterosocial interactions and dating. In V. B. Van Hasselt & M. Hersen (eds.), *Handbook of Social Development : A Lifespan Perspective* (pp.371-394). New York : Plenum.
- Hope, D. A., & Heimberg, R. G. 1990 Dating anxiety. In H. Leitenberg (ed.), *Handbook of Social and Evaluation Anxiety* (pp.217-246). New York : Plenum.
- 堀毛一也 1990 社会的スキルの習得 齊藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック (pp.79-100). 川島書店.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観及び性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 346-351.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知(3) 教育心理学研究, **22**, 205-215.
- Kelly, J. A. 1982 *Social-Skills Training : A Practical Guide for Interventions*. New York : Springer.
- Kelly, J. A., & Hansen, D. J. 1987 Social interactions and adjustment. In V. B. Van Hasselt & M. Hersen (eds.), *Handbook of Adolescent Psychology* (pp.131-146). New York : Pergamon.
- Kolko, D. J., & Millan, M. A. 1985 Conceptual and methodological issues in the behavioral assessment of heterosocial skills. In L. L'Abate & M. A. Milan (eds.), *Handbook of Social Skills Training and Research*. Wiley.
- Leary, M. R. 1983 *Understanding social anxiety : Social, personality, and clinical perspectives*. Beverly Hills, CA : Sage. (生和秀敏 (訳) 1990 対人不安 北大路書房.)
- Leary, M. R. 1983a Social anxiousness : The construct and its measurement. *Journal of Personality Assessment*, **47**, 66-75.
- Leary, M. R., & Dobbins, S. E. 1983 Social anxiety, sexual behavior, and contraceptive use. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 1347-1354.
- 松村千賀子 1991 日本版 Irrational Belief Test (JIBT) 開発に関する研究 心理学研究, **62**, 106-113.
- Newman, B. M., & Newman, P. R. 1984 *Development Through Life. 3rd ed.* Richard D. Irwin, Inc., 福富 護 (訳) 1988 新版生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店.
- Neuman, K. F., Critelli, J. W., & Tang, C. 1986 Male physical attractiveness as a potential contaminating variable in ratings of heterosocial skill. *The Journal of Social Psychology*, **126**, 813-814.
- O'Banion, K., & Arkowitz, H. 1977 Social anxiety and selective memory for affective information about the self. *Social Behavior and Personality*, **5**, 321-328.
- Peterson, A. C., & Hamburg, B. A. 1986 Adolescents : A developmental approach to problems and psychopathology. *Behavior Therapy*, **17**, 480-499.
- Robins, C. J. 1986 Sex-role perceptions and social anxiety in opposite-sex and same-sex situations. *Sex Roles*, **14**, 383-395.
- 齊藤誠一 1985 思春期の身体発育と性役割意識の形成について 教育心理学研究, **33**, 336-344.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. 1985 Social anxiety and self-presentation : A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, **92**, 641-669.
- Schwartz, M. F. 1976 *Stuttering Solved*. Philadelphia : Lippincott.
- Snyder, M., Tanke, E. D., & Berscheid, E. 1977 Social perception and interpersonal behavior : On the self-fulfilling nature of social stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 656-666.
- Spielberger, C. D. (ed.) 1966 *Anxiety and Behavior*. New York : Academic Press.
- Spreadbury, C. L. 1982 First date. *Journal of Early Adolescence*, **2**, 83-89.
- Stevens-Long, J. & Cobb, N. J. 1983 *Adolescence and Early Adulthood*. Mayfield.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 心理学研究, **57**, 134-140.
- Taylor, M. C., & Hall, J. A. 1982 Psychological androgyny : Theories, methods, and conclusions. *Psychological Bulletin*, **92**, 347-366.
- 富重健一 1993 青年期男子・女子の異性不安 (Heterosocial Anxiety) に関連する要因 東京大学教育学部研究科修士論文, 未公開.



- Twentyman, C. T., & McFall, R.M. 1975 Behavioral training of social skills in shy males. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 384-395.
- Watson, D., & Friend, R. 1969 Measurement of social evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- Zimbardo, P. G. 1977 *Shyness : What it is and what to do about it*. Jove.